

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：34416

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25580160

研究課題名(和文)中国古代における軍事費計量化の試み

研究課題名(英文)A Study to Estimate Military Expenditures in the Han Period

研究代表者

藤田 高夫(FUJITA, TAKAO)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：90298836

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、漢代の軍事費を推算することを目的として、そのための歴史資料および方法を検討した。その一例として、漢王朝が羌族に対して行った対外遠征を詳細に分析し、対外遠征の費用概算の方法を示した。ついで、毎年必要とされる経常的軍事費をいくつかの費目に分けて概算した。さらに漢代の常備兵力数について、中央軍・地方軍・辺境軍の各部隊に分けて積算した。結論として、常備兵力の規模よりも、臨時的に発生する対外遠征こそが国家財政に重大な影響を与えることを導いた。

研究成果の概要(英文)：This research aims to estimate military expenditures in the Han period on a discussion of some historical resources and method. As a first example, the author examines a campaign by the Han dynasty against the Tibetan tribes during 61-60 B.C. Secondly, the author analyses a method to conduct calculations of the military cost using item of expenditure. Then, he examines an estimation of number of soldiers in the Han period. As a conclusion, the author emphasizes the risk of military campaign against the imperial finance in contradistinction to standing force.

研究分野：人文学

キーワード：軍事費 常備軍 地方軍 中央軍 対外遠征 軍功 国家予算 部隊編制

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 軍事費の定量的把握の欠如

中国史において軍事が政治・経済・社会のさまざまな面で大きな意味を持つことは周知のとおりであるが、それにもかかわらずその定量的把握については古代国家においてはほとんど試みられなかった。高等学校の教科書には「度重なる対外遠征などが国家財政を疲弊させ、王朝の衰退を招いた」という指摘が幾度もくり返されているが、その具体的な様相にまで言及した先行研究は皆無に等しい状況であった。

### (2) 史資料の状況

如上の状況が生じたのは、史資料の欠如というハードルが存在したからである。従来の文献史料では、軍事に関する数量的データは「歩騎数万」、「撃虜数千」など漠然とした数値の提示にとどまっており、かつその信憑性についても議論を深めようがないという状況にあったからである。しかしながら、近年の辺境出土木簡を初めとする新資料の発見は、こうした漠然とした文献史料の記載を新たな角度から見直すとともに、軍事費を定量的に把握するための材料として利用することを可能ならしめる局面をひらいており、研究に着手する環境がととのった状況に達した。

## 2. 研究の目的

本研究では、次のような問題意識から中国古代における軍事費の定量的把握を試みる。(1) 古代国家の財政面において、軍事費はどれほどの比重を占めていたか。中国古代国家の財政に関する従来の研究は、租税・労役など「財政収入」からの解明に関心が集中し、税制・徭役制などの制度面からの解明においては相当の研究蓄積を有するにいたったが、それがどのように消費されたのかという支出面での研究はなお未開拓の部分が多い。本研究は、支出として大きな比重を持ったと考えられる軍事費を、具体的数字としてどこまで把握できるかという問題に挑戦するものである。

(2) 併せて、「軍事費」と一括されるものを、今日的観点から腑分けし、国家財政にとってその健全性を危うくするような要素がどこに存在するか、言い換えれば軍事費のどのような部分が王朝にとって致命的なのかを見定めることを目的とする。軍事力の維持は国内的にも対外的にも王朝の存立において不可欠のものであることを踏まえれば、それが財政的にいかに負担であっても、支出を簡単に削減するわけにはいかないものである。そうである以上、当該時代においても、軍事費の把握は財政運営の重要な要諦であったはずであり、そのための手がかりが史料上に残されていることが予想される。本研究はそれらの手がかりを新たな視角から掘り起こし

ていくことを目的とする。

## 3. 研究の方法

以上の目的を達成するために、本研究では以下のような課題に着眼して研究を進める。

### (1) 部隊編制面でのデータ収集

文献史料の確認：正史などから、当該時代の軍事編制に関わる記述を摘出し、データベース化する。その記述はきわめて漠然とした数値を示すにとどまると予想されるが、部隊規模の概数を把握するための基礎として用いる。

出土史料の分析：青海省上孫家寨漢墓出土簡を用いて検討を進める。上孫家寨簡は、前漢後半期の軍法・軍令のダイジェストと考えられる史料であるが、そのなかにある行軍規程・部隊識別規程は、將軍のもとに一軍を構成する校尉以下の部隊構成と規模を復元するための稀有のデータを含んでおり、これに基づいて漢代の標準的部隊編制を再現することが可能である。

遠征軍と常備軍の編制：以上の分析を踏まえ、特定の目的を持って個別に行われる遠征軍の編制をひとまず理念的に把握する。また国境警備部隊の規模と編制に関しても、確度の高い数値を算定する。一方、中央・地方の常備的軍隊は、専門的職業軍人による部隊、徴募による部隊など、性格の異なる分隊から構成されており、それらを腑分けしつつ作業を進める。とりわけ地方軍については、北辺と内郡では大きな地域差の存在が想定されるため、『漢書』地理志・『後漢書』郡国志の人口データなどを参照しながら、もっとも整合的な数値を絞り込み、軍事費算定の基礎的定数を得る。

### (2) 消費物資面のデータ収集

文献史料の確認：軍事行動に必要な物資の分量・価格などの情報を文献から求めることはきわめて困難であるが、例外的に『漢書』趙充国伝には、士卒の糧食・馬匹の輸送量などの具体的数値データが多数含まれている。まずそのデータを検証し、これを基礎に同様のデータを他の文献から博搜して、基礎的数値の充実を図る。

辺境出土漢簡の分析：居延・敦煌など長城沿いの軍事施設から駐屯部隊の日常的活動の記録類が大量に出土しており、そこには毎月兵士に配給される食糧量、馬匹が必要とする秣、下級軍吏の俸給など、文献には現れない具体的数値が豊富に含まれている。さらにその帳簿類からは、武器・備品の補修、物資輸送のための労賃、随行する家族などのいわば「間接経費」的費目の存在もうかがわれる。これらの数値を総合して、軍管区である都尉府ごとの年間経常費を算出し、他の軍事行動におけるコスト算定の際に依拠すべき標準的数値を得る。

### (3) 対外遠征費の算定

(1)(2)の研究成果を踏まえた上で、まず対外遠征の費用を概算する。秦漢時代を通じて頻繁に行われた対外遠征は、動員規模・行動期間に大きな幅があり、一括して扱うことは困難であると予想されるため、材料の豊富な河西・西域方面における対外遠征を対象を絞り、遠征コストを試算し、基礎データの妥当性を検証する。

### (4) 常備兵力規模の推算

中央軍の規模：漢代には、首都である長安に相当数の兵力が常駐していた。その中には、宮廷の警備を担う近衛軍の軍隊、騎兵を中心とした特殊部隊が含まれる。この両者を中央軍と規定し、その規模を史書の記載から推定する。あわせて長安には地方から番上して主と警備に当たる「衛士」が存在する。これも恒常的中央軍の一つと考え、その規模を概算する。

地方軍・辺境軍の規模：漢代の常備兵力の大部分を占めるのは、地方の郡国に配置された地方軍である。漢代の成年男子に兵役義務があったことは周知の事実であるが、その制度的詳細は明らかでない。そこで、本研究では、徴兵可能人口のうち、どれくらいの比率で軍事義務を果たし得たか、という観点から、地方軍の規模を推算する。

### (5) 経常的軍事費の推算

(4)での常備兵力規模を基礎に、毎年経常的に必要とされる軍事費を推算する。これがどの程度の財政負担であったのかを、当時の国家予算規模から評価する。これと、臨時的に発生する(3)の対外遠征費の数値を比較することによって、古代国家における軍事行動のコストがどのような問題を惹起するのかを総括する。

## 4. 研究成果

### (1) 軍事編制

中国古代の部隊編制は、伍すなわち五人組を最小単位として、それを組み合わせることでさまざまな規模の部隊が構成された。上孫家寨漢墓出土簡をもとにそれを復原すれば以下のとおりである。

伍(5人) 什(伍×2) 隊(什×5)  
官(隊×2) 曲(官×5) 部(曲×2)  
校(部×5)

したがって、一校は5千人となり、将軍が2校を率いて1万人の軍団を指揮するという規模が、標準的な軍事編制であったことが推測される。ただし、この復原原理は2または5(すなわち陰陽・五行)の数によって下から部隊を積み上げていくという極めて理念的なものであり、騎馬隊が一校2千人で会ったことを示す例もある。しかし同時に、将軍が5校を率いるという記述の存在と併せ考えると、一将軍の標準的な軍団規模は1万人と想定される。

### (2) 経常的費用の基礎データ

軍吏の俸給：俸給の総額を軍吏の階級ごとに積算していくことは不可能であった。そこで前漢に於ける文武百官の俸給総額として把握できた約20億銭のうち、その三分の程度を軍吏に支給すると見積もり、約7億銭と推定した。

糧食費：辺境出土木簡では、軍吏・兵士の一月の糧食は未脱穀で3石3斗3升ほどであることが分かっている。当時の標準的な穀物価格をこれに適用すると、兵士一人あたりの糧食費は同時に支給される塩と合わせて年間約3千銭となる。これに総兵力数を乗じることによって年間の糧食費が算定される。

武器装備費：武器の価格を示す資料は欠落しているため、中央で武器製造にあたる考工室の年間経費、約1千6百万銭を算定の基礎とすると、地方分もあわせると年間1億銭ほどに達すると見込まれる。

辺防工程費：軍営拠点や築城の費用は算定の根拠となる定量的データが欠如している。ただし、工事にあたる工夫は原則として徭役労働であったはずだから、人件費としての支出はなかったと考えられる。史料上に見られる年間「数十百巨万」という数値は、工費の最大限と見なされる。

馬匹と車馬：騎馬隊の維持および軍隊の移動に伴って必要となるこの費用は、欠損分の補充に限定しても算定が困難であった。その原因は馬匹の価格変動が極めて大きいからである。国家の牧官で育成される軍馬の生産量だけで軍需を満たし得たとは考えられず、民間からの徴発・購入がそれを補ったはずであるが、高騰時には1頭20万銭にも達したとする馬匹価格のデータをそのまま適用すると、5千騎の騎馬隊の「資産価値」は10億銭に達する。資料にも軍馬を意味する「車騎の馬」は他の馬匹とは管理上も区別されており、それが極めて高額であったことは確実である。

### (3) 対外遠征のコスト

最も詳細なデータを検出できる前漢後中期の趙充国による対羌遠征を例に、遠征の規模とコストを推算することができた。それによれば、約9万人の士卒が長いもので1年2カ月、短いもので10カ月遠征に従事しており、兵数に月数を乗じた延べ数では総計92万2千人月となる。これに糧食費を乗じるとほぼ10億銭の軍費が必要であったことが算出される。

ただし、これは戦闘部隊が「行って帰る」だけの費用である。遠征軍に必要な物資の輸送にはこれとは別にコストが発生する。それを示すデータは見いだせない。後世の事例であるが、「10を輸送するのに100を費やす」とする記述が宋代・明代の転運に関して存在しており、これによれば輸送コストは、輸送物の10倍にも及ぶことになる。少なめにこ

れをその半分に見積もっても、趙充国の遠征費は、50億に達することになる。この遠征に関して、史書は「一年もしないうちに大司農の錢(国家財政)が尽きた」と述べており、大司農の一年間の財政規模は約40億銭と推定されるから、決して過大な記述ではないことが確認される。

また対外遠征では、その戦果によって多額の賞賜が発生する。趙充国の遠征は、戦闘を極力回避する持久戦であったため、「斬首数」による報償は多くはなかったと考えられるが、武帝期の対匈奴遠征では、将軍に対する賞賜だけで数億銭に上ったことが記載されており、また投降・帰順した異民族への報償もそれと同じ規模の額に達したことが知られる。これを要するに、対外遠征は恒常的な軍事力の維持に必要とされるコストを遙かに超える巨額の支出を国家財政に強いるものであった。

なお、趙充国の遠征ほど詳細が知れるものではないが、後漢・安帝期の西羌平定では14年間で240億銭、順帝期には7年間で80億銭、靈帝期には2年間で44億銭ほどの軍費が必要であったとするデータがあり、単純に平均すれば対外遠征には1年で10~20億銭ほどの支出が費やされたことが分かる。

#### (4)常備兵力の規模

中央軍・地方軍・辺境軍および異民族居住地で編制される属国軍の規模は以下のように算定される。

	前漢	後漢
中央軍	10余万	1.2万
郡国軍	42~70万	15万
辺防軍	15万	2.4万(最小)
属国兵	4万	11万
合計	70万~100万	約30万

後漢の常備兵力が前漢に比して減少するのは、周知のとおり光武帝による郡国兵の廃止の結果である。

この維持のためにどれほどのコストが必要であったかを、最大数を100万として概算すると、糧食費だけで30億銭となり、大司農の予算の過半を消費することになる。ただし、地方軍の糧食費は郡国の備蓄分でまかなわれたはずで、中央軍だけに限定すればその十分の一の3億銭となり、これは国家財政に致命的な打撃を与えるような額ではない。

#### (5)国家財政と軍事費

本研究の成果は、以下のようにまとめることができる。

軍事費が財政上問題となるのは、予定されずに発生した軍事行動、すなわち反乱鎮圧や対外遠征のコストである。戦時において動員される兵力の中には、史書に頻見するように無頼の徴募や刑徒の従軍など臨時に加えら

れる者もあったであろうが、その基幹部分は常備兵力であったろう。そうした常備兵力は、本来は何も事が無くとも維持コストを要するものであり、戦時だからといって維持費が急に膨らむわけではない。糧食や武装などは恒常的コストを大幅に超えるものではなかったと考えられる。実際の戦闘が行われた場合には人的・物的損耗は平時の比ではない。武器の損耗は戦死者以上の数に及んだはずであり、騎馬隊であれば、軍馬の損失はその後の補給の困難を併せ考えると、膨大な損失となったであろう。校尉クラスの率いる騎馬部隊の規模を5000騎程度とすると、これだけで10億銭の「簿価」となる。戦闘による損耗は、その勝敗とは関わりがない。戦闘に勝利しても、そのために失ったものが大きければ、その分だけコストは跳ね上がる。勝利を収めた場合には、軍功に対する報償が必然的にもとなう。戦闘は勝っても高くつくものであった。こうした膨大なコストは、軍事行動を開始する時点では予測不能の部分がほとんどである。遠征の規模と期間によって、「行って帰る」のに必要な経費は算定可能であるが、それ以外のコストは実際に戦闘行為が終わってみないと把握できない。

このように、国家財政にとって対外遠征のような臨時的軍事費こそが、その安定的運営を阻害する最大の脅威であった。さかんに対外遠征をくり返した武帝時代について、史書がそれに起因する国家財政の欠乏を繰り返して記述するのは、決して誇張ではなかったことが、定量的にも裏付けられるのである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

藤田高夫、「漢学」と「中国学」 日本中国近代史学形成の一箇側面、日本对中国文化摂取と創新、査読有、巻号無、2016刊行予定、ページ数未定

DOI: なし

藤田高夫、漢代における軍費推算の資料と方法 軍事費の定量的把握のための覚書、東アジア文化交渉研究、査読有、第9号、2016、321-333

DOI: なし

陶徳民、藤田高夫、内藤書簡研究の新しい展開可能性について、関西大学東西学術研究所紀要、査読無、47巻、2014、36-59

DOI: なし

藤田高夫、木簡の行方 唐代木簡の存否を考えるための覚書、東アジア木簡学のために、査読有、巻号無、2014、75-98

DOI: なし

藤田高夫、東アジアの木簡と書記文化、譜  
写新世界：東亜的文化歴史与願景、査読無、  
巻号無、2013、181 - 186  
DOI：なし

〔学会発表〕(計6件)

藤田高夫、東アジア史を読む、One Asia  
Symposium(招待講演)、2015年11月13日、  
晋州市(大韓民国)

藤田高夫、漢学と中国学 日本における近  
代中国史学形成の一側面、「日本における中  
国文化の摂取と創新」国際シンポジウム、  
2015年11月7日、杭州市(中国)

藤田高夫、林泰輔の中国上代研究、ICIS シ  
ンポジウム「文化交渉学のパースペクティ  
ブ」、2015年7月19日、関西大学(大阪)

藤田高夫、敦煌懸泉置出土伝信簡について、  
古代中世東アジアの関所と交通行政研究会、  
2014年12月20日、立命館大学梅田キャン  
パス(大阪)

藤田高夫、東アジアの書記文化、嶺南大学  
校大学院東アジア文化学科夏期セミナー、  
2014年7月9日、関西大学(大阪)

藤田高夫、東アジアの木簡と書記文化、東  
アジア文化交渉学会、2013年5月10日、香  
港(中国)

〔図書〕(計0件)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

藤田 高夫 (FUJITA, Takao)  
関西大学・文学部・教授  
研究者番号：90298836